

満員電車と日時計

畑山 博



筑摩書房

畑山博

満員電車と
日時計



筑摩書房

満員電車と日時計

昭和四十九年十月三十日第一刷発行

著者 畑山 博

発行者 井上達三

発行所 株式 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話二九一―七六五一 郵便番号
一〇一―九一 振替東京四一二三
印刷 三松堂印刷 製本 葎信堂

©畑山博 昭和四十九年

0031-VOIC-KO3
Printed in Japan

満員電車と日時計

装
幀

焄
農
照
雄

目次

木助の入定

5

崖

27

シグナル

59

島へ帰る日

93

満員電車と日時計

145

あとがき

231

木助の入定

おんばえやれやおんばえや

ねねえどむじなにさらわると

おんばえやあれおんばえや

泣ぐどおもでに連り出すど

人声か、風の音なのか、分からなかった。ほんの一瞬のことであつたが、さき、そう思った。いろりの上に吊るされた木助の死体が、かすかに前後に揺れたと思つた。何日も何日もいろりの煙に燻されたので、瘠せた裸の木助の身体は、火ぶくれに似たふくらみを全身に散りばめ、目鼻の見分けもつかないくらい黒ずんでいた。

人声か、風の音なのか、分からなかった。背をまるめ、しゃがんだ恰好のまま吊るされている木助の身体は、田んぼの畦や寺の石段で、わずかな陽だまりにへばりつくようにしていねむりし

ているときの木助にそっくりだった。ほんと下から尻でも叩いてやったら、いきなりこっちを見下して、さきやん、なんぞ穴掘りの仕事はねえだかよ——手ぶりでそう話しかけてきそうであつた。

ようやくそだに火がついたのか、勢いよく樹脂のはぜる音がする。はっとして目をしばたたくと、野良着姿のさきの大きい影が、煤けた土壁の上を這いずるようによらめいた。燃えあがる炎を背にして切り藁作りをしているせきは振り向かなかった。舞いあがった木の葉の灰が白髪混じりのざんばら髪の上にゆっくりと落ちた。反四俵あて二十俵の年貢を、まるまるはたいも九俵しか納められなかったというのに、今年は、稲の葉だけはふしぎにすすくすくよく伸びたのだった。

暗い土間の隅で、土壁を蹴る馬の気配がする。見あげる屋根裏に、木助の姿はとうになかった。ただ、細い丸太の梁からこぼれ落ちてくる煤が、舞いあがる煙に混じり、自在鉤の周囲をゆっくりと漂っているだけだった。

啞の木助が、村外れの墓場で生まれたのは三十年と少し前。この下田ばかりの谷間の部落には珍しく反四俵の収穫があつた年だということだけれども、今年はそのさきにはむろん知らぬむかしの出来事である。夏の間中思いきり野良着の裾に背にしみこんだ汗と草汁の臭いが、じくじ

くと滲み出してくるようなのは、ようやく身体の隅々までいきわたりはじめたぬくもりのせいだろうか。ふたたび重く閉じそうになる臉をしばたたきながら、さきは、そろそろ夕餉の豆の葉でも煮はじめなければ、と思った。

どうしてか、木助は、人からその話をされることをひどく嫌がった。それだから村の者たちは、子どもから年寄りまで、てんでに木助をつかまえては、その話をしかけてたのしむのだった。木助は木助、おめだばこんだきと名主の家の井戸掘り仕事をいつかるべよ。おらだちの話を聞くだばよ。木助、木助、寺の裏の藪さ行って、股ぐら見せてやるだから、おらの話と聞けよ。まだ十二、三にもならない子どものころから、さきもよくそんなからかい方をしては、木助にべそをかかせたものだった。

羽州倒山郷世弥寺の住職は、莊常の代まではずっと常住であった。七十をとくに越すというのに足腰の強さが大自慢。よく月山、湯殿山などと足をのぼしては、土地土地の土産話を懐にねじこみ、わらじを履き古して戻ってくる。その莊常が、ある年の秋、酒田の港祭りを見物に行った帰りに一人の女を拾ってきた。

土地土地の祭りを訪ねては、合戦や物語の場面を形どった飾り傘をかぶって踊る旅芸人の一座からもらった女だとか、莊常は説明しなかった。あばた面で、瘡せて、赤毛で、おまけにその毛もひどく少ない女。四尺そこそこしか背丈のない女。目鼻だけは子どものような感じなのに、額といわず頬といわずそこいら中が皺だらけ。その様子からだけではとっさに年を想像すること

はできなかった。

女は、飯仕度などもほとんどできないらしく、終日庫裏の軒下などでぼんやりと爪をかんだりしているだけだった。莊常に手を引っぱられ、前肢をつかまれた犬のようにぎこちない歩き方で村へやってきたその日のまま、藁色の筒袖を着て、はだしで立って、いつも上目遣いに臆病そうに村の者たちを見た。

あれは子どもだろうか。それとも大人の女のかたわだろうか。ずいぶん長い間そんな詮索がつづいた後、とうとう一人の百姓が、井戸端で行水しているところを見て確かめたと、ある日得意気にふれまわった。間違いない、あれは女のしるしをもっておったどう。それも、瘡せたあいつの胴腹にはまったく似合わぬたっぷりとしたしるしだったというのである。

そんな女と莊常和尚の共同生活が二年つづいた。二年目の春、莊常は、酒田の知り合いの和尚から送られた鰯があたってあっけなく死に、同じ鰯を食べた女も四日後に死んでしまった。墓場へ運んで埋めるときになって、女の腹の中に赤児がいるらしいことに、ようやく村人たちは気がついた。孕み女をそのまま土葬にするのも殺生だといって、百姓女たちが力ずくで腹から出してやった月足らずの赤児が木助であった。

ごく収獲のよい年でも、反当たり四俵までしか穫れぬ下田を五六反ずつしか耕していない村に、木助を養ってやれる家はなかった。住職のいなくなった寺の庫裏に、木助は藁つとみたいにくるんで放り出されたまま、夏になっても一言の泣き声もたてなかった。以前間引きの赤児も含めて

二人死なせたことのある後家女が、ときどき木の実や草や虫などをとって行つてやると、木助は、むしゃぶりつくようにしてそいつを口の中にはおぼった。が、その女も、翌年の飢饉で死んでしまった。ようやく這えるか這えないかだった木助が、その後どうやって他の百姓の子たちと同じように育つことができたのか、村の年寄りたちはみなふしぎがった。

稲の穂を猪に食いちぎられては木助のせいにし、墓場の近くを手に泥つけて歩いていたといつては、あやつは死人の肉を食うたと言つて打擲し、そんな災難が連日木助の身にふりかかるようになった。が、それも、さきには知らぬむかしの出来ごとである。さきの知っている木助は、とうにはたちをすぎている木助だった。雨ざらしの蓑だけを身にまとい、木助は木の根を食っているのか虫を食っているのか、ごくたまに名主の家などで与えてやる雑穀のかゆをうまそうにすすったりする他には、誰一人として、その物食うところを見た者もなかった。

雨ざらしの蓑の端から瘡せた手脚をつき出して、木助は、ひよいひよいと、ななふしが歩くときみたいな歩き方で、村の往還を行き来した。口からたえずよだれを垂らし、背丈はさほど低いというのでもなかったけれど、母親に似て皺だらけの顔は、年よりもずっと老けて見えた。

なんぞ穴掘りの仕事はねえだかよ。なんぞ穴掘りの仕事はねえだかよ。口からよだれを垂らし垂らし、そう呼ばわっているつもりのか、母の呻き声をあげながら、木助は、村の往還から畦道に入り、小屋のような百姓家の傍にたたずみ、また畦道へと、日が暮れるまで歩きまわった。ごくたまに誰かが肥溜掘りやむろ作りの仕事を与えると、蓑の中からつき出たあの細い手脚でよくもそんな

に早く掘れると思うほど素早く、見事な穴を仕上げた。ふつうの百姓人足だったら二人がかりでまる一日もかかりそうな猪獲りの穴を、一人でわずか半日で仕上げてしまったこともあった。

それを仕上げたからといって礼をもらえるわけではなく、ほとんど一畝の雑穀のかゆぐらいしか与えられなかったのに、木助は、実に嬉しそうに穴を掘った。名主や村の主だった百姓たちが、他の野良仕事をするなら畠をもたせてやろうと言ってやることもたまにはあった。が、木助ときたら穴掘り以外の仕事は何をさせてもへまばかり。種を蒔けと言えばひしゃくで肥しでも撒くようにして放り投げるし、土をかけろと言えば深々と一尺以上も畝を掘り、大事な菜種を棄てたも同様にしてしまうといった具合이었다。

あれは幾度目の飢饉の夏だったろう。切り麦を野良着の中に縫いこんで売りにきた行商人を、村の年寄りたちが寄ってたかって鎌で切り殺してしまったことがあった。あのときの木助のことも、さきはよく憶えている。藩代官所のある隣村から戸板にのせた年寄りたちの死骸が運ばれてくる日の前日、木助は、たおれ山の中腹にできた赤土のむき出しの斜面に這いつくばりながら、嬉しそうに、四角い大きな穴を掘っていた。

部落の墓地は、初め部落から目と鼻の先の河原にあったのだが、幾度かの山崩れで押し流されるたびに、少しずつ山腹の方へ這い上って行った。土砂に押し流され、えぐり取られた墓の跡地に固執することのない村人たちは、たおれ山の尾根に向って少しずつ這い上ってゆく新しい墓の場所についても、感傷を抱いたりしなかったのかも知れない。死んだ者たちの墓は、いつも、

屈葬する身体がすっぽりと埋まってその上にほんの二三寸の土がかぶさるていどの深さにしか掘られなかった。十年おき、ときには五年おきと、山津浪のために根こそぎえぐり取られ、谷に押し出した墓は、そのまま村の田畠の土になじんだのだった。

木助とさきたち村の子どもらのいた場所は、前の山崩れのとくに山肌がえぐり取られてできた窪みのようなところだった。見上げる山頂側の崖には、数百本の杉の成木が、土の中から太い根細い根をつき出して並んでいた。次の山津浪のときまでには間違ひなく梢まで立ち枯れてぶよぶよになってしまふ杉の群れであった。部落の者たちが棚窪と呼ぶそのあたりには、熊笹も他の草草もまだ、ようやく子どもたちの膝の高さほどにしか伸びていなかった。熊笹とかぜくさの茎が絡まり合うようにして生えている地べたに木助の掘る穴は、そのときもう、穴の底に立っている木助の首から下がすっかり隠れてしまふほどの深さになっていた。

何入れる穴っぽだ。よ、木助。何入れる穴っぽだよ。さきたちは、一辺が横たわった大人の身体二人分もありそうな大きな穴の縁にしゃがみ、両手でむしり取った熊笹を木助にぶつけながら叫んでいた。さきの汗ばんだ筒袖の裾は、熊笹の茎にひっかかってめくれ返っていた。答える代りに木助はさきの着物の裾を見あげ、よだれと泥でべとべとになった口許をまたてのひらでこすった。こすりながら木助は何を叫びたいのか。泥だらけの指の隙間から朽ち葉の色をした欠けた歯が覗いて見えた。

「木助死ね。おめだば死ね」

さきは叫んだ。木助死ね、おめだば死ねとてんでに叫びながら、子どもたちは熊笹の葉を投げつづけた。陽射しはさきたちのうなじを腕をじりじりと焦がしていた。あれは陽射しの音だったろうか。耳をすますと、木助の木鋏が土を噛む音に混じって、何かしら焼けた木の皮がはがれるのに似た音が聞こえてくるようだった。

穴の底で木鋏を使う木助の脚は、たえず激しく動いていた。木鋏の刃のすぐそばまで唇を近づけ、屈んだ姿勢で土を掘る木助の恰好は、啞の乞食というよりも、何か大きな虫のように見えた。初めの一かきで胸の下を木鋏で掘り取ると、木助は次に短かい鋏の柄をぐうんと前に突き出しながら身体をひねる。ひねりながら素早く片方の脚を引き寄せて、ひょいっと後へ土を放り上げる。放り上げながら、しかもはだしの爪先はなお休みなく足許の土をかき取っている。

いつか名主の家の豆畠を掘る木助をさきは見たことがあった。木鋏の刃にすれすれになるまで顔を近づけ、振り下ろし、振り下ろして前進してゆく木助の背後に、によるよるの蛇の足跡みたいな敵が伸びていた。せっかく掘ったばかりの隣の敵をつき崩し、横切ってしまったり、ずっと先の方へ行ってまた合わさったり、そんな耕し方をしながらしかも半日がかりで十坪もできない木助だったのに。熊笹の葉をむしってぶつけてやりながら、さきは、そのことも叫んではやしたててやった。

「木助は死びとの子だからそだべ」

「木助は虫を食うてるからよ」